The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	王明「高揚する中国革命」
Author(s)	田中, 仁
Citation	近代中国研究彙報. 1998, 20, p. 43-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

王明「高揚する中国革命」

高島尚生　訳
田中　仁　解説

【解　説】

1

1935年7月から8月にかけてモスクワで開催されたコミンテルン第7回大会は，「ファシズム主要敵」論の確立と反ファシズム人民戦線の提起，およびその植民地・半植民地における適用としての「反帝統一戦線」を提起した。「反帝統一戦線」問題を論じた「植民地および半植民地国における革命運動と共産党の戦術」と題する8月7日の報告において，王明（当時，中国共産党（以下，中共）駐コミンテルン代表団団長でコミンテルン執行委員会委員・幹部会会員）は，(1)日本帝国主義の侵略によって中国は未曾有の民族的危機にみまわれているとして，反帝国主義人民戦線戦術以外に中共が全中国人民を帝国主義に対する神聖な民族革命闘争のために総動員する方法はない[1]と断じ，(2)中共が中国ソビエト政府とともに，全人民・全政党・団体・軍隊・大衆組織ならびに著名な政治・社会の活動家に対し，我々とともに民族防衛の全中国的な統一人民政府を組織しようというアピールを提出した[2]。さらに彼は，(3)反帝統一戦線の結成と拡大・強化をめざして党の諸活動を全面的に転換する必要があることを強調する[3]とともに，(4)四川省において合流を果たした紅軍が「これまでになかったほどの広い・強力な新中央ソヴェト区を貴州・四川・西康・雲南・甘粛・陝西の一部地区に樹立した[4]」中国においても，反帝統一戦線戦術の正しい適用がプロレタリアートのへ

ゲモニーの確立とソヴェト革命のより一層の勝利につながる[5]と主張した。この報告は，従来の「国民党中国」と「ソヴェト中国」との最終的決戦という二分法にもとづく論理ではない中共の新たな政策体系＝「中華民族社会」の防衛を基軸とする統一戦線工作の全面的展開とそのための諸政策の転換を可能にしたという点で画期的な意味を有していた。

すなわち中共は，この報告を踏まえた抗日民族統一戦線政策の展開によって，自らの存在を政治的に，さらには制度的に保障することに成功し[6]，その過程で，統一戦線政策は抗日ナショナリズムに方向づけられた社会統合論としての内実を有するものになっていった[7]。日中全面戦争下における国共合作という新たな環境のもとで，共産党は，それまでの革命闘争のなかで獲得していたもろもろの観点・戦術を中国革命論のなかに定置するとともに，政治的活性化による「革命的」統合という社会変革の手法を具体化していった[8]。

2

コミンテルン第7回大会における王明報告には，5種類の「表題」と26種類の版本を確認しうるが[9]，ここに訳出した『プラウダ』(1935年8月9日）に掲載された王明「高揚する中国革命」(VII всемирный конгресс коммунистичского интернационала, Прения по докладу тов. Георгия Димитрова, Китайская Революция на подъёме, речь тов. Ван Мина, *ПРАВДА*, 9 Августа 1935 г. ①）は，この報告を活字のかたちで世に知らしめた最初のテキストである。このテキストが速記録のダイジェストである点では，9月1日の『コミュニスチチェスキー・インテルナツィオナール』掲載のテキスト②[10]，および1935年にモスクワで発行されたドイツ語版パンフレット③[11]と同じである。この3種類のテキストの特徴は，次のように整理しうる。

(1)②と③は若干の字句上の出入りがある以外，同内容である。さしあたり②③を実際の王明報告の全体像を示すものと考えてよいであろう。

(2)ただし③は王明が報告の際に提示した「地図」を含んでいない。

(3)①は，②③をさらに圧縮した内容となっている（「地図」を掲

載)。

そこで，③の邦訳をもとにして，①において如何なる取捨選択がなされているのかを概括的に提示しておきたい。③の構成は以下のとおりである（ゴチック部分は①の内容を含んでいることを示す)。

前文

一　帝国主義の攻撃の激化と植民地革命勢力の増大

二　反帝国主義統一戦線の結成・拡大・強化は植民地および半植民地の共産主義者の緊急の任務である

前文

中国，ブラジル，アラブ諸国

統一戦線と労働組合運動の統一

党活動の全分野での転換の必要性

反帝国主義統一戦線とプロレタリアートのヘゲモニーおよびソヴェト権力の問題

三　植民地および従属国におけるファシズムの問題

四　革命と戦争の新たな周期における植民地革命の役割と意義

従って①のテキストの基本的性格は，植民地・半植民地における反帝統一戦線を提起した報告のなかから，中国に関する部分をピックアップし，その内容を「高揚する中国革命」というタイトルをもって総括したものであると言えよう。

3

報告において王明は，日本帝国主義の侵略に起因する未曾有の民族的危機と「中国革命の高揚」を踏まえて，抗日民族統一戦線を軸とする中共の政策転換を提起する。しかしながらこの革命の高揚という認識は，1934年秋から翌年夏にいたる中共をめぐる諸情勢—長江中下流域のソヴェト区の喪失・中央紅軍の大幅な減員・政治局の再編・中央紅軍（第1方面軍）による新根拠地樹立構想の曲折，第4方面軍の川陝ソヴェト区離脱など—とあまりにかけ離れていた。そして1935年6月，甘粛省南部への北上を模索するようになっていた第1方面軍2万は，四川全省および西北地区の赤化を主張する張国燾率いる第4方面軍8万と，四川東

部の懋功で合流した。こののち党・軍の組織再編をともないながら北上を開始するが，9月初め，紅軍は張による南下部隊8万と党中央が主導する北上部隊1万4000に分裂するのである[12)]。

それでは，「高揚する中国革命」という情勢認識がいかにして生まれ，そうした認識をリアルに示している「地図」（王明は報告に際してこの地図を掲げた）は，どのような情報にもとづいて作成されたのであろうか。筆者は，(1)1934年5－7月，中央書記処が中央紅軍のソ区撤退を決定しコミンテルンの同意を受けていたこと[13)]，および(2)コミンテルンとの電信連絡を行っていた上海臨時中央局の電信台が同年9月に破壊され中共中央＝モスクワ間の通信が途絶したことが[14)]，この問題を検討する前提となると考える。すなわち1930年以降，スターリンとコミンテルンは，四川を中心とする西北地区に中共の新ソビエト区を樹立することの有効性を提起するとともに，それにかかわる紅軍の動向に注目していた[15)]。王明は，通信が途絶し外部情報に依拠せざるを得ない状況下において，長征期における紅軍の動向（それに関する断片的情報）を，こうした背景のもとで再構成したのではなかろうか。そして主たる紅軍情報は，1935年夏まで上海に存在していたコミンテルン極東局[16)]がもたらした可能性が強い[17)]。

コミンテルン第7回大会の直後，党中央が派遣した潘漢年と陳雲がモスクワに到着した。これによりコミンテルンは，遵義会議決議と長征開始から四川にいたる紅軍の実態を了解した[18)]。このことが，王明に「中国革命の高揚」という情勢認識を改めさせる契機となったと考えてよいであろう。

4

王明報告をめぐるもうひとつの問題は，従来，1930年代なかばの中共の政策転換を示す象徴的文献と位置づけられてきた「抗日救国のために全同胞に告げる書」（八一宣言）とこの報告との関係をどのように理解するのかという問題である。「八一宣言」の起草者が王明であり，駐コミンテルン中共代表団によって作成されたことが明らかになって以来，王明報告と「八一宣言」が果たした政治的役割—短期的な，そして長期

的な一を明確に区別することなく（コミンテルンの大会報告と公開の宣言という資料の性格の違いに留意することは当然であるとしても）論じる傾向があったように思われる[19]。

両者の関係について，李良志は次のように論じている。

> 1935年初夏，日本帝国主義は一連の事件を引き起こして華北侵略を画策し，その結果，民族矛盾が一層激化した。6月，中共駐コミンテルン代表呉玉章らは，キスロボードスクにて療養中の王明に対し，モスクワに帰って対策を協議すべく急電を発した。王明の帰来後，全代表団はただちに国内情勢について討議した。彼はこの代表団会議において報告と討論を行ない，彼が新たな統一戦線綱領を起草することになった。代表団はいくどかの討論をへて，7月14日，中国ソヴェト政府と中共中央の名で発表する「抗日救国のために全同胞に告げる書」を採択した。8月7日，コミンテルン第7回大会における報告のなかで，王明は，初めて世界各国の共産党に対してその主要な内容を読みあげた。この文献は，以後再度の書きかえを経て，10月1日のパリ『救国報』に掲載された。文献の署名期日が1935年8月1日となっているため，「八一宣言」と呼ばれる[20]。

それでは，内容面においてこのふたつの文献はどのような関係があるのであろうか。また，報告で王明が読みあげたという宣言の「主要な内容」とは何であろうか。

衆知のように，「八一宣言」は，(1)未曾有の民族的危機という情勢認識を前提にして，(2)「抗日救国」を中国政治における当面の最重要課題(「神聖な天職」）と位置づけ，(3)「全中国統一の国防政府」と(4)「全中国統一の抗日連軍」の樹立を提唱するとともに，(5)10項目にわたる「国防政府」の行政方針を提示した。このうち，王明報告で言及されているのは(1)から(3)までであり，(4)と(5)についての言及は見当たらない。この点に関して筆者は，報告で(5)が脱落していることについて若干の検討を要すると考える。

すなわち第1に，1930年代なかばの大衆抗日運動の嚆矢と位置づけられる一二九運動が，コミンテルン第7回大会の新方針の伝播を前提としていたにもかかわらず，12月6日に北平学連が発表した9項目の綱領は，「八一宣言」ではなく1934年4月に中国民族武装自衛委員会籌備会が出

した「中国人民対日作戦基本綱領」を継承するものであった[21]。このことから筆者は，(1)この時期の平津地区に「八一宣言」はいまだ伝播していなかった[22]，(2)一二九運動を起動させた新方針の主たる内容は王明報告であった，としたい。

第2に，コミンテルン第7回大会の新方針を陝北の中共中央に伝達したのは林育英（張浩）であり，これにもとづいて開催された瓦窰堡会議は，抗日民族統一戦線政策を党の方針として確定したことはよく知られている。ここで付言すべきことは，(1)林は大会開催中にモスクワを離れ一片の紙切れも持参しなかった[23]，(2)林が伝達した内容として資料的に確認しうるものは，現時点で「林育英・張聞天両同志の第4方面軍宛の電報」（1936年2月14日）のみである[24]，(3)中共中央は1936年3月になってようやく大会関連文献を手に入れた[25]，ということである[26]。

第3に，1935年末から西安事件勃発にいたるまでの間に行われた国共秘密交渉は，蒋介石が有利な力関係を背景に中共問題の根本的解決を図る一方策として，中共との接触を求めたことに始まり，1936年11月には中共代表潘漢年と国民党代表陳立夫によるハイレベル交渉が実現した。交渉そのものは決裂したが，翌月の西安事変の勃発によって周恩来の蒋介石との会見が実現し，急転直下，両党の妥協が成立することになる[27]。ここで筆者が注目したいことは，この国共秘密交渉の最も早期の事例にあたるモスクワでの接触は，1935年末に蒋介石が国民政府駐ソ武官鄧文儀によって提出された王明のコミンテルン大会報告のダイジェストを読み，王明と接触するよう鄧に指示したことにより始まった，ということである[28]。

以上の諸点は，ほぼ同時期に[29]，同一の問題関心をもって王明によって発表・起草されたふたつの文献―「大会報告」と「八一宣言」―が，当時の中国政治に与えた影響には相違があったこと，そして1930年代なかばにおける中共の政策転換を象徴する文献は「八一宣言」ではなく，「大会報告」であったことを示している。

5

このテキストの翻訳作業は，まず『コミュニスチチェスキー・インテ

ルナツィオナール』掲載のロシア語版②とドイツ語版パンフレットの邦訳③の異同を検討したうえで，③と『プラウダ』のテキスト①との対応関係を確認し，③の対応部分を底本として採用した。底本をふまえた翻訳作業を高島が行なった後，田中が訳文を調整するとともに固有名詞の確認作業を行なった[30)]。なお，本文中に【　】で示した数字は③の対応頁である。

☆　　☆　　☆

【本　文】

共産主義インターナショナル第7回世界大会
同志ゲオルギ・ディミトロフの報告に関する討論*

*速記録の要約

高揚する中国革命（同志王明：中国）

【531】同志諸君！植民地および従属国の人民に対する帝国主義の攻撃の激化とすべての植民地および半植民地諸国における帝国主義に対する被抑圧民族の民族解放運動の成長とともに反帝国主義統一人民戦線の問題は，同志ディミトロフが全く正しく指摘したように，排他的重要性を有している。

未曾有の民族危機

【532】最初に中国の例を提示しよう。中国国土のかなりの部分でソヴェト革命がいったん勝利し，階級闘争が激しい尖鋭化をみるようになると，反帝国主義人民戦線の問題はもはや重要な意義をもっていないと考えている人もいる。しかし，これは許し難い誤りである。事実はまさに反対であることを示している。事実は明らかに，今日の中国での反帝国主義人民戦線の問題は単に重大な意義をもっているどころか，いわば決定的な意義をもっていることを示しているのであり，示しつつある。

なぜか？それは中国が未曾有の民族的危機に見まわれているからである。この未曾有の民族的危機はまず第一に，日本帝国主義の軍事・政治・経済的膨張の増大と国民党政府の例をみないほどの恥しらずな民族的裏切りによってひきおこされたものである。1931年の満州事変勃発以後の期間，つまりここ4年たらずのうちに中国の領土のほとんど半分が日本帝国主義によって，一部は占領され，一部は事実上日本軍閥の鉄鎖のもとに置かれている。

満州の次は熱河，熱河の次は長城に囲まれた地域と山海関，山海関と長城の戦略的拠点—いわゆる「灤東非武装地帯」—，「灤東非武装地帯」の次は河北・チャハル・綏遠各省の日本軍による事実上の占領という具合に，田中メモランダムのなかで立案されている，国家としての中国の完全な抹殺計画が系統的に実行に移されているのである。

最近数年間，蔣介石・汪精衛・張学良らの売国奴，黄郛・楊永泰・王揖唐・張□□[31]らの日本帝国主義の手先らは，「無抵抗」政策によって中国の各省を次々に売り渡し，日本の要求に次々に応じていった。また同時にこれらの裏切者たちは，自国民に対し流血の戦争を行ない，「まず第一に国内の治安を確立し，しかる後に外敵に対する抵抗を行なう必要がある」というデマを流して，抵抗を行なって祖国を救おうとするあらゆる民衆運動を抑えてしまった。最近では，これらの売国奴たちは「中日提携」のスローガンのもと，中国の歴史にも世界の歴史にも例をみない露骨で屈辱に満ちた，買弁的な降伏的政策をとっているのである。【533】こうした事態が今後もつづくならば，われわれの他の省も，やがて日本帝国主義掠奪者に占領されることは明らかで，そうなったなら人類史上5000年という最古の文化をもつわが国は，ついには植民地と化し，世界でもっとも数多い4億5000万の人民は，完全に奴隷状態に陥るだろう。

反帝国主義統一人民戦線

問題は非常にはっきりとしている。すなわち，帝国主義の攻撃に対して抵抗するべきか—それは生を意味する—，あるいは外敵に対する抵抗を断念するか—それは死を意味する—，のいずれかである。増大しつつ

ある民族的危機の状況下で中国を救う手だては，われわれ偉大な人民すべてを帝国主義に対し断固とした仮借なき闘争に総動員すること以外にはない。同時に，共産党が全中国人民を帝国主義に対する聖なる民族革命闘争に総動員するためには，反帝国主義の統一人民戦線戦術以外にはないのである。

中国共産党は，ここ数年，反帝統一戦線戦術を採用し，現在も採用している。

【534】共産主義者は19路軍を支援するため，上海にあるすべての在華紡で労働者のゼネ·ストを組織した。またわれわれの上海党組織は，前線の戦闘に参加するため労働者・学生からなる多数の武装部隊，また軍を支援し後背地を守るため輸送・連絡・偵察・補給・赤十字などの各部隊を組織した。またソヴェト中央政府はきわめて困難な財政事情にもかかわらず，数万ドルを英雄的な抗日労働者ストの支援のため送ったのである。

にもかかわらず，中国共産党は，今日にいたるまで，いまだこの戦術を現実に首尾一貫させ，誤りなく遂行するすることに成功していないという事実を，重大に受けとめ認めておかなければならない。

たとえば，中国共産党は，英雄的な上海防衛の間，日本の占領軍に反対している19路軍の武装闘争を支援するすべての人びとときわめて幅広い反帝国主義統一戦線を結成しなければならなかったはずである。それにもかかわらず，「労働者・農民・兵士・商人・知識人の団結」というスローガンを許せないとした，一部のわが党の指導者の誤った考えのために，真に広範な抗日人民戦線は結成されなかったのである。中国共産党は，上海にゼネ・ストを組織し，日本帝国主義に反対するすべての赤色労働組合，および改革主義的・国民党系労働組合の広範な統一戦線に基づいて，労働者の武装を目標としなければならなかったはずである。しかし，われわれの労働組合活動家の右翼日和見主義的サボタージュ，および左翼セクト主義的誤りによって，ゼネ・ストのスローガンは実施されず，前線に送られるはずの労働者の武装も比較的小さな規模でしか実現しなかったのである。

【535】福建事変の際，この事件が日本帝国主義とその手先である蒋介石に対して，共同して戦うために国民党部隊と軍事協定を結ぼうと紅軍が

呼びかけた直接の結果であり，従って真剣に19路軍と福建省政府に対し，いわば自分の同盟者として扱わなければならなかったことに中国共産党は立脚すべきであったはずである。にもかかわらず，この「中国発展の第3の道，すなわちソヴェトでもなく，国民党でもないもう一つの道を見つけようとする試み」に対する闘争という問題について示した一部のわが党指導者たちの機械主義的な見解のため，中国共産党は福建事変の政治的意義を適切に評価しなかったのである。したがってこのことから，われわれの軍事的失敗も生じてきた。つまり，江西・福建両省の非常に重要な東北部戦線において蔣介石に対して19路軍と協力して戦うかわりに，中国紅軍指導部はこの戦線から部隊を撤退させ，蔣介石軍の背後を攻略しようと，南方および西方へ部隊を移動させることに決めてしまった。そのため戦闘中の19路軍に対し，時宜を得た，効果的かつ本格的支援を行うことができる状況にはなかったのである。

【536】わが党は，祖国救済をめざす普遍的闘争に中国人民をできるだけ迅速かつ現実に団結させるため，最も勇敢・最も広範・最も強力な規模にまで反帝人民戦線の戦術を発展させなければならない。

では中国共産党のこの戦術は，今後どのようにして発展しなければならないのだろうか？私個人および中国共産党中央委員会全体の見解によれば，この戦術は，中国共産党が中国ソヴェト政府とともに，全人民・全政党・団体・軍隊・大衆組織ならびに著名な政治家および社会活動家に対し，われわれとともに，全国統一の民族防衛人民政府を組織しようとアピールすることでなければならない（拍手）。

同時に，中国共産党はその責任を十分に自覚して，全人民の前に次のことを明確に言明しなければならない。すなわち，中国共産党はこの民族防衛の統一人民政府に，ソヴェト政府の代表とともに，植民地奴隷にはならないと望んでいるすべての人びと，人民と祖国の防衛に自分の武器を向ける用意のあるすべての兵士や司令官，聖なる民族解放闘争に参加しようとするすべての政党，団体および組織，人民と祖国を本当に愛している国民党や藍衣社のなかのすぐれた青年たち，自分の母国救援を望むすべての在外同胞，また帝国主義者とその手先である中国軍閥の圧政下にある少数民族の兄弟たちすべてが参加することを歓迎する，と。

中国共産党のこうしたアピールがただ煽動的・宣伝的性格しかもたず，

実際的な成果をもたらすことはありえないと考える人びとがいる。しかし，同志諸君！これは全く正しくない。

【537】わが党のこのアピールは，完全に現実的・客観的かつ主体的要因にもとづいているものである。中国の客観情勢は，わが党のこのようなアピールの実現可能性について，雄弁に物語っている。その例証として私は，現在の中国情勢のありのままの姿を明確に示している非常に多くの事実をあげることができる。この姿のなかには，中国内の勢力関係における変化と変貌がはっきりと反映されており，こうした変化や変貌は，武力抵抗と祖国救済の必要性という考えがもはやたんに幅広い中国人民大衆だけでなく，司令官を含めた国民党軍隊のかなりの部分，また国内の多くの著名な政治家や社会活動家をも捉えていることを示しているのである。

その例証として私は，次のような事実や人々の活動を話すことにしたい。

1．1932年1月から3月にかけての日本に対する19路軍による英雄的な上海防衛。19路軍は国民党軍隊から編成されていたが，この軍隊は，蒋介石の命令で2-3年にわたってわが紅軍に対して戦闘を行なっており，そして一度ならず敗北を喫していたのである。しかし，1931年9月18日の満州事変以後，とくに日本の上海攻撃および人民の抗日行動が未曾有に増大した結果，この19路軍は，蔡廷楷・蒋光鼐・翁照垣らの司令官を先頭に，南京政府の命令に反して，自らの武器を日本帝国主義に向け，まさにそのことによって中国人民の解放闘争の歴史に最も輝かしい一頁を書き加えたのである。

2．1933年末から34年初めにかけての福建事変。その際，前述の司令官率いる19路軍は，南京政府と国民党の恥ずべき民族的裏切りの苦い経験（たとえば，蒋介石は上海防衛の際，19路軍の武装解除のため自軍を派遣したが，派遣軍が日本帝国主義に対する共通の戦いのため，19路軍の側に自発的に寝返った結果，蒋介石の計画は頓挫してしまった）をかみしめ，さらに自国民，すなわち紅軍に対する戦闘行為に憤激を感じるようになって，日本帝国主義およびその手先である蒋介石に対する共同闘争の軍事協定を紅軍と結び，あらたに武器を人民の敵，つまり蒋介石に向けただけでなく，国民党からの脱退と南京政府とは独立した福建人

民政府を組織することを公然と表明したのである。この福建事変には，軍閥の有名な大物，陳銘枢・李済琛らも加わっていた。

3．1933年華北で行われた吉鴻昌・方振武・宋哲元らの将軍が指揮した国民党軍団の抗日・反蒋武装行動。吉鴻昌将軍のとった態度は，これらの軍団やその一部の司令官たちの急進化をもっともよく証明している。すなわち吉鴻昌将軍は，国民党第30軍司令として，蒋介石の命により自軍を率いて2年間にわたって紅軍第4軍と河南・湖北・安徽省の戦線で戦っていた。しかし，解放闘争における紅軍と赤色遊撃部隊の闘志に動かされ，日本のために南京政府がたえず裏切ることに憤激し，吉鴻昌将軍は人民の側に移る必要を感じはじめた。

【538】しばらくして，吉鴻昌は中国共産党中央委員会に対し，自分を共産党の隊列に受け入れるよう切願し始めた。わが党中央委員会は彼を党員に加えた。それ以来，彼は共産主義者として活動し，党のあらゆる指示と指令を遂行した。彼は自分の財貨を革命と人民のために捧げた。祖国救済のために軍事力と人民の力を結集しようとする，彼の積極的な活動が全華北に息吹を与えるようになると，蒋介石ははじめ日本帝国主義の支援のもと吉鴻昌暗殺をたくらんだ。その事件で重傷を負った吉鴻昌は逮捕され，蒋介石の命令で北京で処刑された。中国および外国の各新聞報道によると，同志吉鴻昌と彼の支持者の任応岐は，肉体的悪条件にもかかわらず，国民党の法廷で，あるいは刑場において，不屈の献身的な民族の英雄・人民の闘士としてふるまった。彼らは真の革命闘士として，人民のために死んだのである。法廷で彼ら2人は，国民党が人民と祖国に対して行った無数の罪状を声高く，憤激しながら数えあげた。処刑を前にして2人は「中国共産党万歳！日本帝国主義とその国民党の手先どもを倒せ！」と叫んだのである。

【539】4．1933年の日本帝国主義に対する中国人民の民族戦争の組織化についての基本綱領の発表。これには宋慶齢をはじめ数千人の人々の署名が集まった。

民族的・社会的危機が今後さらに深まるにつれて，中国社会のすぐれた，立派な人びとが，帝国主義とその手先による奴隷化から同胞と祖国を救う戦いに立ち上がろうとすることに，疑念を抱くことができるだろうか！

中国における紅軍とソヴェトの増大

中国共産党のアピールの現実性は，国家の客観的情勢だけでなく，主体的要素の成長に，つまり紅軍とソヴェトの力の成長にもとづいているのである。

コミンテルン執行委員会第13回総会後の1年半の間に，中国紅軍は新たに大きな勝利をかちとった。以前の中央ソヴェト区であった江西・福建両省の紅軍主力が，中国共産党中央委員会および中華ソヴェト中央政府の指導下に，ほぼ100万を数える蒋介石軍の戦略的包囲から脱出することに成功したばかりではない（地図で示しながら)。すなわち，南部および西部戦線の敵の環を突破し，江西省から中国西北部へ英雄的行軍を成し遂げたのである。中国紅軍の主力は9省にまたがる地域をとおりぬけ，けわしい山脈・道なき道・大きな川を克服し，3000キロメートル以上を戦いながら（同志マヌイリスキー「英雄的な中国紅軍万歳！」，嵐のような拍手)，国内戦の歴史に例をみない勇敢さと無比の戦争技術を示したのである。紅軍は四川省への移動の総合計画を時宜よく実行し，成都近郊で赤色武装兵力のもう一つの主力部隊（第4軍）と合流し，この兵力とともにこれまでにはなかったほどの広い，強力な，新中央ソヴェト地区を，貴州・四川・西康・雲南・甘粛・陝西各省の一部地域に樹立したのである。

【540】紅軍の活動力は，最近の各ソヴェト区における苦しい戦いにくじけるどころか，著しくその力を増している。敵対的な内外の新聞の数字によっても紅軍正規軍の数は現在すでに50万に迫っているといわれている。

さらに紅軍部隊の大半は，以前は分散し互いに連絡もとれていなかった。現在では地域的に統合されているか，もしくは遊撃部隊やその他の組織との相互連絡を確立した。以前は紅軍の主力は江西・福建両省の地区にあって，長年にわたる戦争や敵の間断なき全面的な封鎖をうけて，経済的にもひどく痛めつけられていた。しかしいまでは，紅軍の主力は四川・西康・貴州・甘粛など各省の広大な地域を占領している。そこは軍の補給あるいは兵員補充の源泉がはるかに大きく，また軍事的防衛を

同志王明が報告の際，大会ホールに掲げた地図

組織するにもずっと容易で，敵が攻撃計画をたてるどころか，軍事的包囲を行なうことがまったく困難なところである。

最近，紅軍がなしとげた大勝利は，次の事実によっても裏づけされている。すなわち，紅軍正規部隊を100万にまで増加し，住民を1億まで包含できるほどにソヴェト区の領域を拡大しよう，という中国共産党のスローガンが，すぐ近い将来に十分実現されうることである（拍手)。

紅軍および中国ソヴェトのこの新しい歴史的勝利は，紅軍と中国ソヴェトが日本に対する武装抵抗と祖国救済の戦いで中国人民の指導者および結集センターとして，もっと高く，もっと大きな力で行動することを，疑う余地なく可能にしたのである。

主体的要素が強化されていることは，たんに紅軍やソヴェトの成長によって証明されるだけでなく，党の成長によっても十分証明されるのである。中国共産党は，すでにほぼ50万の党員を数える政党になった。そして，ソヴェト区において多数の労働者だけでなく，多数の人民大衆をも味方に引き入れたのである。

【541】中国共産党の成長とボリシェヴィキ化について，何よりも次の事実が物語っている。すなわち，コミンテルンのレーニン・スターリン路線にもとづき，民族闘争・階級闘争という厳しい学校で，共産党は，革命の大事業に身を捧げる数百数千の闘士を養成し，鍛え上げることができたし，困難を恐れず，それを克服するため立ち向かっていく有能な，闘志あふれる幹部をつくりだすこともやりとげたことである。これらの闘士のなかには以下の同志，毛沢東・張国燾・項英・周恩来・博古・張聞天・林祖涵，王稼穡らのすぐれた党および国家の指導者がいた。またこれらのなかには以下の同志，朱徳・彭徳懐・徐向前・賀竜・董振堂・陳昌浩・蕭克・林彪・羅炳輝・劉伯承などの多くの伝説をうんだ軍司令官がおり，またこれらのなかには以下の同志，彭湃・楊殷・瞿秋白・羅登賢・蔡和森（これらすべて中国共産党中央政治局員)・鄧中夏（党中央委員)・惲代英（党中央委員兼中国共産青年団の指導者)・陳元道・何子述（反李立三闘争のすぐれた指導者)・莫憑蘭（すぐれた共産主義者）などの民族の英雄および階級闘士がおり，敵が与えた拷問や獄中で受けた残忍な行為に対して彼らが示したボリシェビキらしい不屈さと英雄的な死は，すべての共産主義者の戦う手本となり，全中国の世論を歓喜さ

せたのである。またそのなかには以下の同志，黄公略（党中央委員兼紅軍第5軍軍長），沈沢民（党中央委員），魯易（紅軍第2軍政治委員）・尋淮州（紅軍第7軍団政治委員）のように，ソヴェトと紅軍のため最後の血の一滴まで戦った大胆不敵な，英雄的戦士もいた。これらのなかには，同志孫小宝・同志傅維玉らのように，英雄的な上海防衛の際，そのもっとも重要な戦闘で生命を捧げた有名な民族の英雄もいたし，また満州における日本占領軍に対する戦闘で英雄的に生命を犠牲にした童長栄，伯陽らもいた。またこれらのなかには，同志方志敏・同志劉□□[32]・同志王□□[33]のように中国労農紅軍の有名な先遣隊のすぐれた指揮官かつ政治活動家で，敵の法廷で紅軍と共産党の輝かしい旗を高く掲げ，中国の善良な人びとみんなの共感と畏敬の念をひき起こした人びともいた。

中国共産党のイデオロギー・政治・組織の成長は，党がレーニン的なコミンテルンの指導下にあること，また党がコミンテルン各支部の経験と支援，何よりもコミンテルンの指導的支部であるソ連共産党（ボリシェビキ）の非常に豊かな経験を利用することができることから明らかである。わが党のこの成長はウラジーミル・イリイッチの死後，マルクス・レーニン主義の理論と戦術全般を，そのなかでもとくに植民地革命におけるマルクス・レーニン主義の理論と戦術をさらに発展させ，また中国革命の戦略・戦術の基礎を理論的につくりあげた人，すなわち偉大なるスターリンの教えに忠実であることに負っている（長くつづく嵐のような拍手。「ウラー」「ワンスェイ」の歓呼，全代表団の歓声）。【542】中国共産党の力の増大こそ，党が反帝国主義統一戦線の問題を新しいやり方で勇気と決断をもって提起することを可能にするのである。

ところで，中国共産党のこのアピールは，ありふれた戦術であり，現実的政策ではないと考える人がいる。しかし同志諸君，これも全く正しくない。

なぜか？なぜならこれらの人びとは，共産党には人民の利益以外，いかなる利益もないという真理を理解していないからである。帝国主義に対して武装抵抗し，祖国を救済するということは，はたして中国人民の利益に合致しないというのだろうか。もちろん，合致しているはずである！中国，それはわれわれの祖国である！中国の国民，それは共産主義

者・紅軍および祖国のすべての息子と娘たちのことである！

永遠に人々の記憶に残る英雄たち

【557】中国革命は，なによりもまず帝国主義大国すべての労働者の支援を必要としているのである。この点について，同志ディミトロフが，大会を代表して，中国人民のあらゆる帝国主義的掠奪者と中国におけるその手先からの解放闘争に対し，援助を与えるというコミンテルンの堅い決意を確約してくれたことについて，全中国人民に代わって感謝の言葉を述べることを許していただきたい。あなたがた，プロレタリアートと全地球上の被抑圧民族の代表である同志のみなさんは，熱烈な拍手と大歓声によって，同志ディミトロフのこの確約に完全に同意してくれた。

また，このことに関連して，私はあなたがたに，2カ月前に，われわれの一人の英雄的な日本人同志によって遂行された，真の革命的・国際的連帯についての感動的な歴史的行為を紹介しなければならない。それは今年6月23日，吉林省東部の寧安県で，一人の日本軍の自動車運転手が6万発の小銃・機関銃の弾丸および手榴弾・爆弾を満載したトラックを，中国の抗日遊撃部隊がいつも隠れていた人里離れた鉱山に運んできた。長い間探しまわったが，彼は遊撃隊に会えなかった。進撃してくる日本軍部隊の銃声が近くで鳴り響いたので，日本人の運転手は自殺を決意した。

中国の遊撃隊は日本軍の攻撃を撃退し，6月24日早朝，山中の道でトラックと運転手の死体を発見した。彼のポケットから遊撃隊に宛てた遺書が見つかった。この手紙のなかで，日本人運転手は次のように書いていた。

【558】

「抗日人民軍とすべての抗日遊撃部隊の親愛なる同志よ。

私は，あなたがたにわずかな贈物―6万発の弾丸とたくさんの手榴弾，爆弾をもってきました。私は，あなたがた民族の英雄に，われわれの親しい愛する中国人民に，そして日本帝国主義掠奪者に対する戦いをわれわれとともに戦っている兄弟党，栄誉ある中国共産党に，日本共産党や日本の勤労人民たちが抱いている限りない愛情・連帯感・尊敬

の念について個人としてあなたがたとお話ししたかった。私は長い間待っていたが，ついにお会いできなかった。私は近づいてくる日本軍部隊の銃声を耳にしている。こうなるといったい私になにができようか。日本軍に私は帰りたくないし，また帰ることもできない。そこで私は自殺を決意し，あなたがたにこのわずかな贈物を残そうと決心した。しかし，これらがあなたがたの手に無事届くかどうかわからない。無事届いてくれと願っている。

力一杯の握手をします。

同志的挨拶をこめて　あなたがたの一日本人共産主義同志より。1935年6月23日。」

（嵐のような拍手。代表たちは「インターナショナル」を斉唱。）

これは偶然の行為ではない，この行為は歴史的な意義のある行為である。この行為は極東の二つの偉大な人民が互いに抱いている愛情・尊敬・連帯感を反映しているのである。しかり，同志諸君，われわれは日本帝国主義に反対しているが，日本の人民を愛しているのである（拍手）。われわれは日本帝国主義に反対しているが，それは日本帝国主義がわれわれ中国人民を抑圧し，搾取し，抹殺しようとしているがゆえである。しかし，われわれは日本人民が，われわれと同様，同じ共通の敵，すなわち残忍な，血なまぐさい日本帝国主義に対する戦いを，われわれとともに遂行しているがゆえに，日本人民を愛しているのである。

しかり，同志諸君，これはわれわれの英雄的な日本の共産主義同志のなかの一人にしかすぎない。革命的国際主義のこうした英雄は，日本の共産党や他のわれわれの党にも多数いるにちがいない。しかし，一人のこのような英雄が，当然のこととして，全世界の革命家や優秀な識者たちの賞賛と尊敬を呼び起こしているのである。私は大会の全参加者に，このわれわれの永遠に忘れられない，愛する，尊敬すべき不滅の英雄，すなわち名も知れぬ日本の同志をしのんで，起立してたたえていただくことをお願いしたい（全員が起立）。

【559】われわれの不朽の英雄に永遠の名誉あれ！

その隊列のなかで，革命的国際主義のこのような英雄的な闘士を育て上げたわれわれの英雄的な日本共産党に栄誉あれ！

全世界が誇りにできる，このような偉大な息子を生み出した英雄的な

日本の労働者階級と日本の勤労人民に栄誉あれ！

自分の生命を世界革命という偉大な事業に惜しみなく捧げた，このような真に偉大な英雄を，この隊列においてのみ鍛え上げることができる，われわれのレーニン・スターリンのコミンテルンに栄誉あれ（拍手)。

共産主義者および社会民主主義の労働者同志諸君！植民地革命の問題は，植民地および従属国の人民が地球人類の絶対的多数を占めているがゆえにのみ重要なのではない。この問題は植民地の人民の大多数が実際に勤労者であるがゆえにのみ重要なのではない。また，われわれ自身の労働者階級とその党の一部がそこに存在し戦っているがゆえにのみ重要なのではなく，そこに同じ人民の敵が事実上支配しており，その彼らに対し，そして彼らの権力を打倒するためにあなたがたが自分自身の本国で戦っているからこそ重要なのである。植民地革命を軽視する態度，それは共産主義者と前衛的な労働者の間に見られる社会民主主義的偏向の一遺物である。それとは，断固として訣別しなければならない！

階級闘争の今日の国際情勢のなかで，われわれはいかなる犠牲をはらっても，資本主義諸国のプロレタリアートと全植民地世界の抑圧された人民の，真の戦闘力ある世界的な革命統一戦線を，帝国主義とその手先の世界的な反革命統一戦線に対する闘争のために樹立しなければならない（拍手)。

われわれはそれを行なうための基本的な前提条件をすべてもっている。われわれは帝国主義という共通の敵をもっており，社会主義樹立の闘争という統一プログラムと共通の目標をもち，世界革命の戦略・戦術をもち，ソ連邦という革命闘争の一つの要塞をもち，コミンテルンという一つの世界党をもち，偉大なスターリンという一人の先駆者と指導者をもっているのである（全代表は起立して拍手)。

【560】同志諸君！われわれはウラジーミル・イリイッチの最後の論文であり，彼の遺言となったものをいつも思い起こさなければならない。彼はそのなかで，戦後資本主義の発展についての展望と，資本主義と社会主義の間の闘争の展望について明確な評価をしており，また同時に，社会主義世界と資本主義世界の決戦期における植民地革命の役割と意義について評価を与えている。この論文の結びで，レーニンは次のようにいっている。

「闘争の結末は，結局ロシア・インド・中国などが巨大な人口を擁していることにかかっている。そしてこの多数の人口が，最近非常な早さで解放闘争にすいこまれるようになっている。したがって，この意味から世界の闘争の最終結末がどのようなものになるかについて，いささかの疑念も存在しない。この意味から，社会主義の最終的な勝利は完全に，絶対に保証されている。」*

*『レーニン選集』第2版，第27巻，415-417頁。

しかり。先進帝国主義諸国の労働者階級および植民地世界の非抑圧民族がファシズム・資本主義および帝国主義戦争に対する共通の闘争，ソヴェト権力と社会主義のための共通の闘争に立ち上がったまさに今日，社会主義の最終的勝利は完全かつ絶対に保証されている。

同志諸君！前進しよう，そしてマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの理想を高く掲げよう！共産主義インターナショナルの理想を高く掲げよう！全世界社会主義革命に向かって前進しよう！（嵐のような拍手。イギリス・スペインその他の代表団の歓声，中国代表団は「インターナショナル」を合唱，大会参加者全員がそれに伴唱）。

注

1) 王明「植民地および半植民地における革命運動と共産党の戦術」日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第7巻（以下『資料集』）勁草書房1973年532-533頁（本稿翻訳の対応部分を参照）。
2) 同上書536頁（本稿翻訳の対応部分を参照）。
3) 同上書549-550頁。
4) 同上書539-540頁（本稿翻訳の対応部分を参照）。
5) 同上書551頁。
6) 拙稿「路線転換期における中国共産党の根拠地構想」横山英・曽田三郎編『中国の近代化と政治的統合』溪水社1992年。
7) 統一戦線「戦術」を社会統合「理論」として捉えなおすことについては，西村成雄『中国ナショナリズムと民主主義』（研文出版1991年）の41-44，66-69頁を参照。
8) 拙稿「中国革命の歴史的再検討」上原一慶編『現代中国の変革』世界思想社45-47頁。
9) 拙著『王明著作目録』汲古書院1996年61-64頁。
10) Ван Мин, О революционном движении в колониальных и полуколониальных

странах и тактике компартий, *Коммунистический Интернационал*, No. 25.

11) Wan Min, *Die revolutionäre Bewegung in den kolonialen und halbkolonialen Ländern und die Taktik der kommunistischen Parteien.* (邦訳は『資料集』)

12) この間の事情については，さしあたり拙稿「一九三〇年代なかばにおける中国共産党の危機と再生」曽田三郎編『中国近代化過程の指導者たち』(東方書店1997年) の194-197頁を参照。

13) 中共中央党史研究室一室編著『≪中国共産党歴史・上巻≫注釈集』中共党史出版社1991年212-213頁。

14) 中共中央党史研究室『中国共産党歴史・上巻』人民出版社1991年334頁。

15) 楊奎松『中共與莫斯科的関係』東大図書公司1997年348-354頁。

16) 楊奎松『中共與莫斯科的関係』275頁。

17) 長征の「落脚点」に関する毛里和子の考察は (毛里和子「長征期のいくつかの問題」『国際問題研究』第2号1970年)，本文に記した諸点を踏まえて再検討する必要があろう。

18) 楊雲若・楊奎松『共産国際和中国革命』上海人民出版社1988年336-337頁。1935年5月30日に瀘定橋で開催された中共中央政治局会議は，白区党組織の再建およびコミンテルンとの通信の復旧を目的として陳雲を上海に派遣することを決定した (中国人民解放軍歴史資料叢書編審委員会編『紅軍長征 (綜述・大事記・表冊)』解放軍出版社1989年123頁)。当時，陳は中共中央書記処書記であり (王健英編著『中国共産党組織史資料匯編・増訂本』中共中央党校出版社1995年308頁)，遵義会議における政治局の再編をコミンテルンと中共代表団に伝達しうる立場にあった。

19) ここでは筆者自身の事例を掲げておく。拙稿「中国共産党における抗日民族統一戦線理論の確立」(池田誠編著『抗日戦争と中国民衆』法律文化社1987年88-90頁) は，具体的政治過程における両者の役割を並置して論じている。また拙稿「中国革命の歴史的再検討」は，「『八一宣言』における抗日民族統一戦線の提起とそれを踏まえた系統的な統一戦線工作が共産党の革命運動の決定的転機であった」(51頁) としている。しかしながら本文で述べるように，この「八一宣言」の部分は「王明の大会報告」とすべきであると考える。

20) 李良志 (拙訳)「抗日民族統一戦線樹立における王明の役割について」『大阪外国語大学論集』第2号1989年245頁。これは手書き原稿を起したものであるが，その全文は，「王明」の部分を「中共駐共産国際代表団」あるいは「代表団団長」に改めるなどの改訂を行ったた上で，『中国人民抗日戦争紀念館文叢』第1輯 (1989年) に掲載されている。

21) 拙稿「華北事変と中国共産党」『現代中国』第68号1994年226頁。かつて矢沢康祐は，「中国人民対日作戦基本綱領」と「八一宣言」の類似性を指摘しつつ，民族武装自衛運動から一二九運動を経て救国会運動にいたる抗日大衆運

動が中共の路線転換をリードしたという論点を提示した（矢沢康祐「1930年代中国における帝国主義と反帝国主義」『歴史学研究』第279号1963年）。現在，この綱領が1933年10月27日の王明・康生の中共政治局宛書簡に由来することが明らかになっており（周国全・郭徳宏『王明年譜』1991年安徽人民出版社64頁），また抗日大衆運動と中共地下組織との関係も徐々に解明されつつある（さしあたり，拙稿「国民政府時期，転換期の上海における中国共産党の組織と活動」『大阪外国語大学論集』第1号1989年を参照）。具体的実態を踏まえた上記の論点に対する再検討が求められる。

22)「八一宣言」の中国への伝播は，1935年11月ごろであると推察される（在上海総領事石射猪太郎→外務大臣広田弘毅「中国ソヴィエト政府及中国共産党連名ノ反日檄文ニ関スル件」昭和10年11月22日外務省外交史料館ファイルI-4-5-2-1-1）。また唐宝林は，宣言の平津地区への伝播を1935年末から1936年初めとしている（唐宝林「『八一宣言』最早伝入国内的途径和時間」『党史研究資料』1991年第3期20頁）。

23) 楊奎松『中共與莫斯科的関係』314頁。

24) 楊奎松『西安事変新探』東大図書公司1995年72頁。電報の全文は「コミンテルンの指示は原則的なものである。すなわち，(1)統一戦線，これが基本的策略方針である，(2)国防政府と抗日連軍，これが統一戦線の最も広範かつ最高の表現である，(3)労農ソヴェトの人民ソヴェトへの改編，(4)富農政策。これらすべてはすでに打電ずみである」となっている（同前）。

25) 楊奎松『西安事変新探』東大図書公司1995年55頁。

26) 山極潔は，「八一宣言」の陝北への伝播過程を分析するにあたって，瓦窰堡会議決議が提示する「国防政府」の10項目の行動綱領と「八一宣言」のそれを比較・検討している（山極潔「コミンテルンと中国共産党・上」『東洋大学紀要・教養課程編』第28号1989年7－8頁）。大会の王明報告において後者が提示されていないことは，報告段階でそれが代表団内部において合意を得るに至っていなかったことを示唆している。当然林育英は，モスクワを発つまで代表団の一員として宣言の作成作業に参加していたはずである。とすれば前者は，7－8月段階における駐コミンテルン中共代表団の「八一宣言」案を反映したものであるという推論が成立する。

27) この間の事情については，楊奎松『失去的機会？』（広西師範大学出版社1992年）の1－26頁を参照。

28) 楊奎松『失去的機会？』4頁。

29) 王明の大会報告（8月7日）と「八一宣言」の発表（10月1日）の間に，「中国革命の高揚」という情勢認識の見直しが行なわれ始めたことからすれば，必ずしも「同時期」とは言えないかもしれない。大会終了から宣言発表にいたる間の中共代表団内部の議論については，典拠を明示していが，楊奎

松『中共與莫斯科的関係』302頁を参照。

30) 固有名詞の確認には，1935年10月にパリで発行された大会報告の中国語テキストである王明『論反帝統一戦線問題』(本庄比佐子編『王明選集』第4巻所収) を用いた。

31) 原文は「Чжан Чу-ин」。ドイツ語版邦訳では「蔣作賓」を (『資料集』532頁)，王明『論反帝統一戦線問題』では「張群」を (『王明選集』第4巻202頁)，それぞれ当てている。

32) 原文は「Лю Чжю-си」。ドイツ語版邦訳・王明『論反帝統一戦線問題』とも対応する固有名詞が見当たらない。

33) 原文は「Ван Чу-чжи」。ドイツ語版邦訳・王明『論反帝統一戦線問題』とも対応する固有名詞が見当たらない。